

1. コラム「論点提起」：新年の夢 新しい世界に向けて変わりきれぬや如何

2024 年、甲辰（きのえたつ）がスタートした。世界は、コロナ禍を契機とした分断化、ウクライナ侵攻を契機とした新たな地政学的リスクの励起、そして地球的気候変動リスクの顕在化等が進み、産業革命以降の資本主義経済の GDP 的「経済成長」が限界を迎え、GDP をも包摂する GGN（Gross Global Well-Being）的「心の成長」に向けたパラダイムシフトの踊り場にあると云われる。

▼世界経済の 50 年の歩みと未来に向けた展望 一橋大学名誉教授 野口 悠紀雄 日立総研創立 50 周年記念特集 機関紙「日立総研」Vol.18-2(2023 年 11 月) <https://tinyurl.com/2x4toyqc>

▼GDP から GGN へ 豊かさの指標の人類史的転換 慶應義塾大学教授 前野 隆司 機関紙「日立総研」Vol.18-2(2023 年 11 月) <https://tinyurl.com/yqdj9zsg>

▼資本主義から半身になる「人新世の幸福論」とは何か 2023.12.28 Forbes <https://tinyurl.com/yqz46m32>

日本においても、今後とも、総人口が減り、高齢者が太宗となり、結果して労働人口が減り、GDP の絶対値も、一人あたりの GDP も減少し、GDP 的経済成長を期待できそうにない。国土構造的にも、東京（圏）の一極集中は進み、東京以外は「森化」が進み、「世界の古都」化が進みそうである。

▼日本の地域別将来推計人口（令和 5（2023）年推計） 令和 5（2023）年 12 月 22 日公表 国立社会保障・人口問題研究所 <https://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson23/t-page.asp>

▼生産性評価要因の国際比較 2023 年 12 月 22 日（公財）日本生産性本部 <https://tinyurl.com/ykju68l9>

大きな時代の節目には当然ながら混乱が起きる。1990 年代以降の GDP 的経済的成長が止まった以降、産業界での経営トップと現場とのギャップ（経営目標と市場のギャップ）に起因する連綿とした企業不正の勃興、企業価値の低下等はその象徴的事象である。政・官・学も同様である。

一方で、こうした踊り場には、歴史的にみれば、新たな宗教・芸術・文化・技術、そして様式が生まれ、創造的破壊（イノベーション）があらゆる分野で勃興し、次の新たなパラダイムの時代へと繋がっていく。イノベーションとは、換言すれば、新陳代謝であるが、日本の戦後は高度成長期の成功体験が故に、あらゆる分野で新陳代謝が起こりにくくなった。新たなユニコーン企業は勃興せず、政治の世界においては世襲議員が太宗化するなど家業化している。しかし、そうした時代の当事者も後期高齢者層に移行し、世代交代が現実化している。まさに 30 年一世代である。

いずれにしても、新陳代謝をせざるを得ない環境と条件が整いつつあるのが現在の特徴である。総人口の急激な減少（戦争、感染等）は、過去の歴史を見てもイノベーションの源泉となっている。自らをマルチシェア（副業・複業、他地域居住）し、技術（ロボット、ドローン、生成 AI 等）を活用し、ビジネスモデル（DX/イノベーション）を変え、テレワーク等柔軟な子育て・生き方を可能とする働き方改革の実践は、個人の生き様の選択肢、創造性を高め、一人あたりの付加価値生産性を高め、ひいては利益率が高い産業創造につながる可能性を秘めている。その可能性が顕在化するかどうかは、国/地域/組織（政・官・学・産）、個人のレジリエンス（適応力）次第である。そこには「成長」ではなく、「持続」があり、縄文時代が 1 万年も持続した仕組みが想起される。

「春の日差しが、あまねく成長を助く年」（甲辰）に相応しく変わりきれぬや、新年の夢や如何！